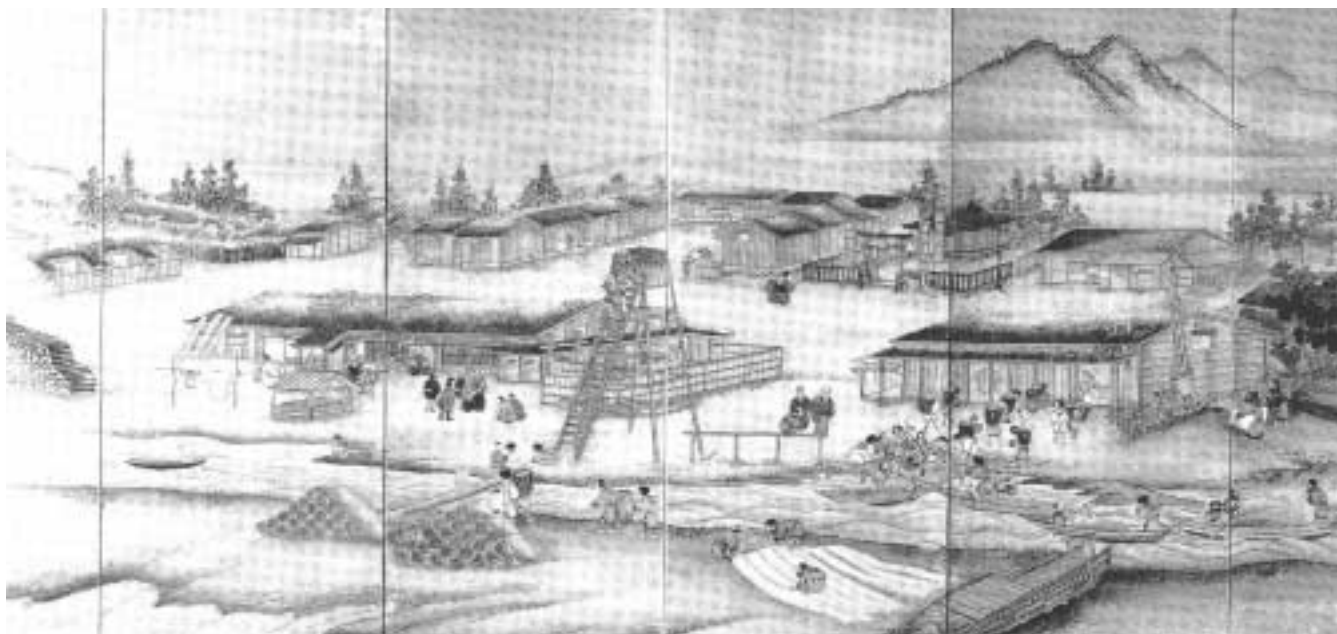


# オホーツクの海が見える陣屋

『御陣屋御造営日記』から



標津の様子を描いた屏風（江戸時代：部分）。魚見櫓の右は塩切蔵で、アイヌが鮭を運び入れている。櫓の左の建物が会所・番屋アイヌの住居も描かれている。

近世城郭の築造を歴史的に概観してみると、そのピークは二つあると言われます。一つは当然江戸初期で、もう一つは江戸末期です。異国船の来航が急増し、対外的に緊張状態になった時期に一致します。典型例として松前や福江、五稜郭などを挙げることができます。

この時期、蝦夷地では幕府の命令によって奥羽の諸藩が警備のため出張します。そこには当然、陣屋あるいは役所が築かれることになりました。このニュースでは、会津藩が現在の北海道東部に築いた標津の陣屋に関する史料を一部紹介してみます。

安政5年（1858）、日露和親条約が締結されると、幕府は新たに会津・庄内の2藩に蝦夷地の警備等を命じました。会津藩は紋別、斜里、そしてこの標津を藩領とし、幕領の網走の警備も行うことになりました。

標津（しべつ）は現在北海道根室支庁に属しています。国後島をすぐ目の前に望む北辺の小さな町です。会津藩はここに陣屋を築くことにしたのです。陣屋の場所は、現在の標津市街からは南にはずれたホニコイだったようです。

文久2年（1862）、会津藩は本格的に陣屋の造営に着手します。それに先立って諸職人を集める算段が行われます。「爰元より町職共召連諸入目何程相懸り候哉の旨、紙面御渡御尋に被成」とあるように、準備としてまずは戸切地陣屋の工事で蝦夷地担当を配下に抱える普請奉行への調書です。

尤箱館表の儀は御国元と違ひ職人の賃銀莫大の事に御座候、其上彼地にて切組手扱等の程も難計不案内成義に御座候、<文久2・7・4>

函館では職人の賃金が高く、かつそこで材木の加工をするにも職人の質がよくわからないと言っています。開港された函館ではいろいろな普請が多く、さらに開港の影響で物価も上昇していたのでしょう。また、本土から流入する有象無象も多く、「手扱等の程」がひどいこともままあったのかもしれませんが、担当の役人としては慎重にならざるを得ません。

この陣屋造営に際して、普請方では鈴木平八と嶋影徳之進を先遣として出張させることになりました。戸切地での実績を買われてのことでしょう。しかし戸切地の仕事から帰国して1年で再び蝦夷地へ出張、それもオホーツク沿岸まで行くことになるかもしれません。相当に大変な出張だということは奉行も十分承知していたようです。

小身の者共兼て難渋に罷在候上、右遠境数月の間逗留罷在諸雑費案外に掛り増他借を以漸活計罷在候、<文久2・7・6>

いつの世も組織では下っ端が貧乏くじをひくようですが、せめて特別手当を支給するように奉行が藩へ働き掛けてくれているのが救いです。一週間後には鈴木に2両2分、嶋影に1両2分を支給することが指示されました。また奉行は、

一不 擲金正気散 一無名異 一熊胆

但し、熊胆の義は容易に御渡に不相成、則合と相見候処、境遠辺鄙の場所柄炎天折柄出起氏仕候義に御座候はば、格別の御吟味を以此度の限り御手当被成下度奉願候、<文久2・7・5>

と、薬の特別支給も訴えています。熊胆の下賜が厳しいのは、藩の統制下にある貴重な蝦夷交易品だったこととも関係があるのかもしれません。

藩の方も使える人間は使います。勘定所は蝦夷地への御用荷を2人に託します。すると奉行は勘定所に対して

多分嵩み乗合行及兼候間、雇舟賃御渡被下度、尤役場御用荷は御用済の上持参罷歸り候義に御座候間、往来分御渡被下度、申達候、<文久2・7・27>

と返します。自分の荷物のほかに公用の荷物を運ぶには荷物が嵩んで別に雇舟が必要になるからそれも公用で面倒みてね、どうせ帰日も持たされるんだから往復分ですよ、と言うべきことは言っています。当然のことを確認しているのを見ると、どうも前年の出張で苦労させられたのでしょうか。今回は幕府の北方政策に関わる緊急事態ですから、普請方としては少し強気に出ているのかもしれません。文書には「七月廿八日駄賃方へ達の通相廻り」と注記があるので、早速翌日には申達にそう形で処置が実行されたようです。

鈴木らはこの8月6日に若松城下を出立し、越後に一旦出て、出羽経由で蝦夷地へ渡海し、函館には25日に到着の予定でした。約20日間の行程になります。実際には、青森で10日間風待ちを強いられ、青森を出帆したのが閏8月2日で、海中を漂うこと「四日三夜」それも「大乱風」だったというから、命がけの出張となりました。そして6日に戸切地陣屋に到着。10日も余計にかかったことになりました。この余計な出費も当座は「他借を以」て凌がなければならなかったのかもしれませんが。

蝦夷地に渡った彼らは、大工道具や資材の調達などの仕事に取り掛かります。いよいよ陣屋建設が始まることとなります。



"Shiro Fumi" No.24 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.